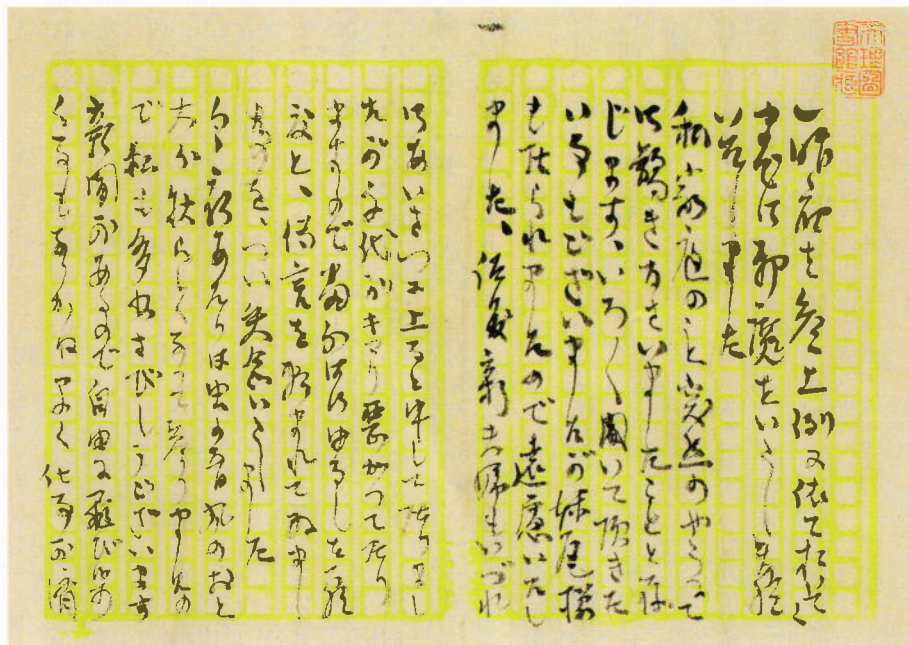


やまとの名品 天理図書館



谷崎潤一郎書簡 (根津松子宛)

昭和5年(1930)8月16日付 3枚
各縦24cm 横34cm

東京・日本橋に生まれた谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）は、関東大震災後に関西へ妻・千代ら連れて移り住みます。新天地で一から作家生活をやり直そうとする彼を支援したのが、大阪の豪商・根津清太郎で、宛名の「根津御奥様」とは、この清太郎の夫人・松子です。彼らは、家族ぐるみの付き合いをしていました。

本書簡が書かれたのは、「佐藤新夫婦」「家を佐藤に明け渡す」などの文面から、谷崎が、昭和五年（一九三〇）に千代をめぐって佐藤春夫と起こした「細君讓渡事件」の直前と推定できます。

まず谷崎は松子へ、突然に家族の醜態しゆうたいを知らせて驚かせたことを詫び、次に、四十四歳で

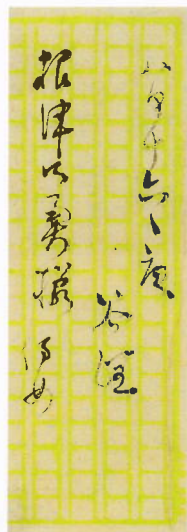
無妻となった寂しさをしんみりと語り伝えて「女中ばかりでなく御嫁さんも御心がけ」を哀願。さらに、今後も上方で暮らすつもりであり「御宅様より外は御すがり申すところもなく」と、文豪はすっかり頼りきった態度を見せます。

不安定な夫婦生活が続く中、商家の御寮ごせうさんは高嶺たかねの花だ、とあこがれを抱きつつ、微妙な距離を保ち続けながら、『盲目もうめく物語ものがたり』や『春琴抄しゅんきんしょう』などでは、

松子をモデルにした作品を次々に生み出す谷崎でした。その想いは、初対面から八年が経った昭和十年、ついに松子と結ばれることで成就され、終生を共に過ごすのでした。

没後五十年の節目にあたる今年の一月に出版された、千葉俊二編『谷崎潤一郎の恋文―松子・重子姉妹との書簡集―』（中央公論新社）では、この手紙が松子宛書簡の巻頭を飾っています。

（天理図書館 倉石 実）



天理図書館のお知らせ Tel：0743 - 63 - 9200 <http://www.tcl.gr.jp/>

◆平日（午前9時～午後5時半） 土・日・祝（午前9時～午後4時半）

○6月の休館日：30日

（本書簡は、5月17日～6月14日開催の、天理ギャラリー第155回展「手紙－筆先にこめた想い－」（<http://www.tcl.gr.jp/tenji/k84.htm>）に出品します）